

# 学長室だより

2019.06.11 NO.17

## 子どもの「異文化交流」

「秋田」を拠点に世界との交流を深めようと、国際教養大学が開学以来、果たすべき責務の一つとして取り組んでいるのが「異文化交流」だ。本学の学生や海外からの留学生は忙しい勉学の合間をぬって県内外の小・中学校などと交流しており、その数は年間220件を超える。

30年以上も前だが、夏休みに外務省の事業で国内から公募した小中学生約30人のグループが米国南部のジョージア州やルイジアナ州を訪問し地元の自治体や学校を訪ねて交流するというプログラムがあった。私は3年間ほど指導員として参加した。

10日間ほどの旅程だが、参加する小中学生たちにとって親元を離れての海外での長旅というのは生まれて初めての経験で、成田空港からの渡米前、眠れない出発前夜を過ごしていた。

米国では陸路でも1日に数百キロの長距離バスで移動した。私の仕事は車中で参加者全員に、数行ずつの英語であいさつ文や自己紹介文を作り、語学のおぼつかない小学生や中学生にはカタカナを振って手渡すことだった。

海外で緊張する毎日を過ごす次第に仲良くなる。子供たちも真剣に取り組み、何十回も音読し何とかスムーズな英語で発音できるようになった。おしゃべりも弾むようになったが、東北や九州から参加した子供たちは方言や発音が独特で、理解しづらい場面がよくあった。

当時よく覚えているのが、秋田など東北勢の子供たちの会話だった。「この旅行が終わって家に帰ったらアワビ取りの仕事をしなくちゃ」、「朝の搾乳が大変なんだ」。彼らはすでに一家の働き手としての役割を果たしていた。車外の景色はどこまでも続く米国南部の大平原。一人前の仕事をすでにこなす彼らが、米国南部の小中学生と何とか英語で意思疎通しようとしているのを応援したいと思った。

訪問先の南部の小中学生も、都会育ちではない。親の仕事はとうもろこしや小麦の生産農家や牧場の牛飼いが多かった。彼らは何百ヘクタールという農場や牧場で、大人と一緒にコンバインに乗ったり、大型トラクターで牧草刈りをしたりする。搾乳も何百頭もの牛を同時に行っていたそうだ。

当時は今以上に農作業や牛の世話の方法が日米で異なっていた。私は交換会で米国と日本の子供たちからの質問を交互に通訳しながら、同じような仕事でも、違うやり方でどのようにしているのかを丁寧に説明した。同時に私自身、子供たちのやり取りの中に身を置きながら、不思議な感動がこみ上げてきた。自分の仕事と役割を小さな子供たちがなんのてらいもなく話している光景は素朴でありながら、実に自信ありげに見えた。

あのときの子供たちも、もう40歳を過ぎたよき大人になっているだろう。幼いときのあの経験は彼らのその後の人生にどう影響しているだろうか、興味は尽きない。



鈴木 典比古

注) 朝日新聞秋田版「あきたを語ろう」からの転載です。以下 URL からご覧いただけます。  
<http://www.asahi.com/area/akita/articles/MTW20190611051550001.html>